

例会佳句

梅雨が明けると本格的な夏がやってくる。陽射しが熱く、入道雲が空に湧く。梅雨明けごろは蒸し暑い日が多くなり、雷を伴って夕立のような雨が降る。これを送り梅雨といい、梅雨明けの兆しとされている。学校は夏休みに入り、人々は涼を求めて海、山へと出かける。

大暑は二十四節気の一つで、陽暦では7月23日頃。暦の上で大暑と言えば、夏の終わりの時期であるが、実際には最も暑気が厳しい。朱夏は暑い夏を色彩的に表現したものである。立秋を過ぎると早くも残暑となる。

土用は立春、立夏、立秋、立冬の前の18日間をいうが、現在は通常、土用といえば立秋前の18日間、7月20日頃に土用入りする夏の土用をいう。暑さの盛りで、体力の消耗しがちなときでもある。土用の丑の日は夏の土用の間にある丑の日のことで、この日にうなぎを食べると暑気負けをしないと、江戸中期の科学者、平賀源内が薦めたことにより、今もその習慣がある。

ビールは今では冬でもよく飲まれ、季節的な飲み物といえなくなったが、やはり夏が一番であろう。冷えて冷たいビールをグイと飲むときの至福感は格別である。

(ゴシックの俳句は会員互選の上位句)

(四季の会 世話人)

本堂の長き廊下の余寒かな
束の間の香り留めむ沈丁花
庭の木の影濃くなれり春障子

東京 坂本 州賢

里山の大樹一景囀れる
冴返る七堂伽藍空高し
つかの間のすきをつかれて春の風邪

兵庫 高森 功一

菜の花の彼方は九十九里の浜
囀に目を醒しけり辞令の日
菜の花の山波ゆるく房総路

千葉 門脇 耕水

日を重ね風なほかさね沈丁花
雨上る気配囀フォルティシモ
雛あられ窪みほどよきたなごころ

大阪 加藤 あや

囀りの奥また奥の古墳かな
紅梅に風まだ粗き日のつづく
尼寺にただ一株の沈丁花

神奈川 森 京 子

囀や門に威を張る陶の犬
雨降れば匂い沈めし沈丁花
寒空に籠持つ行列野菜高

神奈川 中 本 萬 里

囀るや壕の向こうに応えあり
深川の亡き人乗せる花筏
入学にランドセル買う遠き祖母

東京 北 誥 南 風

駅頭に托鉢の僧春疾風
沈丁花夜の女の六畳間
永き日や駅前駐在大欠伸

千葉 加 藤 浩 雲

大寺の大樹を揺らし春一番
囀に目覚め戸を開け湖畔宿
古寺巡礼参道長し長閑なり

東京 中 西 麦 人

囀や芝に絵の具の十二色
挨拶を返す浦の子初桜
花冷や紅茶に落とす角砂糖

宮城 鈴 木 わ か ば

生垣となりて十年沈丁花
前衛句残し兜太は二月逝く
清張の点と線手に春の旅

千葉 安 彦 緑 泉

揺れ昇る連凧引く子はしゃぐ子ら
春蘭の淡き緑やひっそりと
裸足の子追われる波や春暑し

東京 坂 本 秀 浩

水道・下水道人の俳句の会 「四季の会」 入会歓迎

申込先 〒102-0074 東京都千代田区九段南4-8-9
日本水道会館内 日本水道新聞社気付
「四季の会」世話係 まで